

アジア太平洋研究科 博士学位論文要旨

見えない核被害

—マーシャル諸島米核実験被害の実態を踏まえて—

4003S015-3 TAKEMINE, Seiichiro 竹峰誠一郎

主指導教員 篠原初枝教授

Keywords : マーシャル諸島, 核実験, ヒバクシャ

<本論文の目的>

住民の証言と米公文書の両面から、中部太平洋に位置するマーシャル諸島の地域社会に対する、米核実験被害の実態に迫り、解明していく。そのことをとおして、周辺に置かれている各地の核被害者と、かれらが背負う核被害をどうとらえ、接近し、可視化していくのか、その一つの方法を帰納法的に導き出していく。

<本論文の結果>

「グローバルヒバクシャ」(以下、グローバルヒバクシャ)という視角から、周辺化されている核被害を受けた地域社会の人間存在を中心に据える。しかし核被害は知覚し難く、かつ不可視化されている。マクロの観点から、核被害をとりまく差別構造を射程に収め、核被害の括り方を問い合わせる。同時にミクロの観点から、核被害地のサブシステムを探求し、サバイバーズとして生き抜いてきた人びとの声に耳を傾けていく。グローバルヒバクシャの眼鏡のフレームに、マクロとミクロの遠近両方の眼鏡レンズをつけ、核被害をとらえ可視化していく方法を、マーシャル諸島米核実験被害の実態を踏まえ、本研究は提示した。

<本論文の意義>

第一の意義は、グローバルヒバクシャという概念を本研究が新たに提起したことである。グローバルヒバクシャとは、核開発の中で生み出された、核被害を訴える世界の人びとの存在を視野に収め、甚大な環境汚染が地球規模で引き起こされてきた現実をくみ取るべく指定期定した、新たな概念である。

グローバルヒバクシャの射程は、平和学における核問題のアジェンダセッティングのありかたを問い合わせるものである。日本平和学会が「被爆体験に根ざした戦争被害者としての立場からの普遍的な平和研究を制度化しようと考えている」と設立趣意書に謳い設立されたことを想起し、核開発の被害を受けた地域社会の人びとを中心に据えた研究を活性化させ、平和学がもつ特性を磨いていくねらいがある。

グローバルヒバクシャの射程は、また社会学における広島・長崎原爆被害者の生活史調査で確立されてきた「原爆と人間」の視点を援用したものであり、原爆被害者の生活史調査を世界の核被害者に開いていく扉となる概念である。

第二の意義は、個人を単位に放射線被曝と疾病の因果関係の有無だけで、核被害が切り取られることを問い合わせし、地域社会を単位に、マクロの視点も加味し、より包括的に核被害をとらえていく視座を、本研究が提起したことである。

個々人の疾患にのみ注目するならば、地域社会の生活基盤を破壊する核被害の拡がりや、政治的・社会的現象として生じる核被害が捨象され、核実験が地域社会の人びとに与えている包括的影響を過小評価することになりかねないことを本研究は指摘した。

そのうえで、ミクロの観点から、地域社会の人びとの「生きる場」に意識的に光を当てるサブシステムの視座をもって、個々人の疾患の有無だけではこぼれ落ちる、地域社会の生活基盤への核被害の拡がりを捉える方法論を本研究は提示した。またマクロの観点から、核被害をとりまく構造、とりわけ差別構造を射程に収め、政治的・社会的現象として生じる核被害の側面を押さえていく方法論を、本研究は提示した。

核被害を包括的に捉えていくには、公害研究の蓄積から生み出された飯島伸子の「被害構造論」を援用していくことは有意義である。しかしその場合、飯島が提示した健康被害にはじまる被害の連鎖と共に、

土地の被曝にはじまる地域社会への被害の連鎖を新たに組み込む必要がある。また被害の構造に深く切り込んでいくには、マクロの観点から、加害者側の一次資料にあたることが求められよう。

第三の意義は、核実験被害像の見直しを、説得的に提起したことである。米政府が設定したマーシャル諸島の核実験被害の線引きのありかたを本研究は問い合わせし、枠外の地域にいるアイルック住民の声を丁寧に拾い、機密解除された米公文書と照らし合わせる作業を行った。これらをとおし先駆的な調査研究のなかでも実相解明の対象とされてこなかった「視野の外に置かれてきた」アイルックの核被害者の存在が本研究で明白となった。もはや米政府が被害を認定しているビキニ・エニウェトク・ロンゲラップ・ウトリックの四つの地域社会の枠内で、マーシャル諸島の米核実験問題はとらえることは到底できない。水爆ラボ実験だけでなく 67 回におよぶマーシャル諸島の米核実験の全体を視野に入れることが重要である。

グローバルヒバクシャの核被害と向き合うにあたって、加害者側が提示する核被害の延長線上では、核被害は到底視えてはこない。核被害の括り方を問い合わせし、核被害の影響がないとされている「視野の外」に置かれている地域社会の人びとの声に耳を傾けることを出発点に、加害者側の公文書などを調査し、加害者側が提示する核被害像を塗り替えていく作業が、核被害を可視化していく上では求められる。

以上の本研究の成果は、平和学の分野でグローバルヒバクシャ研究という新たな研究分野を切り開いていくものである。また社会学の分野で、原爆被害者の生活史調査を世界の核被害者に開くと共に、公害研究の蓄積を活かし軍事活動に伴う環境被害研究を展開していく一助に、本研究はなるものである。

<本論文の目次>

序章

1 章 終わりなき核被害

2 章 核実験場の選定とビキニとエニウェトクの人びと

3 章 核実験反対の世論と米政府の対応

4 章 被曝を生き抜くロンゲラップとウトリックの人びと

5 章 『視野の外』に置かれたアイルックの人びと

終章 「見えない」核被害——可視化するアプローチを求めて

<主な資料>

・口述資料

2001 年から 2006 年にかけて、6 度にわたり、約 8 ヶ月間マーシャル諸島に滞在し、延べ 120 人以上から得た聞き書き ほか

・米公文書資料

National Archives at College Park, Maryland

RG 77, 126, 128, 165, 218, 313, 326, 374

Department of Energy Open Net System ほか

・文献資料

飯島伸子 [1993] 『改訂版 環境問題と被害者運動』学文社

濱谷正晴 [1994] 「原爆被害者問題の社会調査史」(石川淳志・橋本和孝・濱谷正晴=編著『社会調査—歴史と視点』ミネルヴァ書房、1994 年、第 11 章：273~310 頁所収)

前田哲男=責任編、高橋博子・竹峰誠一郎・中原聖乃=編著 [2005] 『隠されたヒバクシャ——検証=裁きなきビキニ水爆被災』凱風社